二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

闇の小公女 リゼル

小説 さかき傘
挿絵 あぶりだしざくろ

序　章　兄と妹と　006
第一章　雨夜の異邦人　010
第二章　キス　024
第三章　魔女の逆襲　049
第四章　芽生えゆく悦び　091
第五章　堕ちた妖精　121
第六章　姦く肉罠　162
第七章　再会　189
終　章　妹と兄と　248

登場人物紹介

Characters

リゼル・バラン

英国黒魔術組織の頂点に立つバラン家の令嬢。運動能力を強化する魔術と、斬った相手の精神を破壊する謎の大鎌を使う黒衣の少女。

黒崎 慶吾（くろさき けいご）

日本の黒魔術界を牛耳る黒崎一族の当主。人間の魂を結晶化する呪術を得意とする。

黒崎 俊太郎（くろさき しゅんたろう）

慶吾の息子。父の威光をかさに着て、日本の闇社会で傍若無人に振る舞う肥満体の青年。

アルデ・バラン

バラン家の跡取りだが、黒崎家の陰謀により死亡したリゼルの兄。だが、魂を失ってもなお、その身体に強大な魔力を秘める。

第四章　芽生えゆく悦び

その日よりリゼルは、黒崎の邸宅に監禁されることとなった。

いかなる扉にも束縛されない『開錠の魔術』を心得た彼女ではあるが、常に数名の見張りがついているため脱走は不可能である。兄の杖がともにあればまだしも、彼女一人の力で黒崎宅を警護する用心棒たちを蹴散らすことはできなかった。まして隙をついて屋敷から逃げたとしても、中にアルデを残していくわけにはいかない。

とりあえず命だけは保証されているため、兄がとばっちりを受けないためにもリゼルは大人しく幽閉されている道を選んだ。

あてがわれたのは例の電動椅子が置かれた個室である。ベッドと椅子とスクリーンの三点だけが彼女に与えられた全て。窓さえないため、監禁が始まって何日経ったのかさえ、リゼルには次第に分からなくなっていた。

時おり与えられる食事が一日三食のものだとしたら、だいたい一週間程度だと思うのだが、数時間ずつ日に何度も眠っている彼女には、正確なところは分からない。食事はリンゴ味のつけられたパック入りのゼリーなので、栄養素は足りているらしいがすぐお腹が空く。それに合わせた食事ペースだとしたら、まだ一週間経っていないのだろうか？

とにかく少女にとって、永遠にも等しい時間が流れた。
その間、処女を奪われた彼女のもとには、絶えず俊太郎が訪れている。

ハッハッと息を乱しながら、リゼルはすがるものを求めて俊太郎に抱きつく。
その拍子に身体の中央を串刺しにしている芯棒と秘粘膜の接触面がよじれ、少女の口からは自然と甲高い喘ぎが漏れた。
とにかく絶倫の俊太郎は、一日のうちで自分がその気ならば欠かさず女肉を求めた。いまもあぐらをかいた彼の上に乗せられ、対面座位でリゼルは、蜜にふやけた若粘膜をぐいぐい擦られているところである。
「ンっ……。んんぁ……。ふっ、〜〜〜ぅぅぅ〜〜……」
だがその唇から漏れる声はあまり悲愴なものを感じさせなかった。雪色をした頬には、濃い紅色の官能が刻まれている。
この監禁生活で少女の肉は少しずつ変化させられていた。
もともと幼いがゆえ過度に敏感だった肌に、性感をすり込まれたのである。いまも何度か洗濯された以外は初日から変わっていない黒衣の中に手を入れられ、ほとんど隆起のない薄い胸板をさすられると、ゾクゾクッと胸が震えた。指先がピンクの先端部に悪戯を始めると、鼻先から艶っぽい声が出る。

手首を錠前と鎖に縛られた両の手が、自然と男の首にすがるように伸ばされた。
「ひひっ。ほら、もっと口を吸わせるんだ」
その中でもとくに性感帯に仕立て上げられたのが口腔だった。厚すぎず薄すぎず、これといった主張はないながら桜色の整った唇は、数年の邪恋が込められたためか俊太郎が四六時中吸いついている。
そうしているうち、歯茎を他人の舌でくすぐられるたび頭の中がクラクラするほど、少女の口腔は過敏になった。
「あぅ……っ。ハンっ、しゅんたろ……、そんな吸わないで……」
自らも舌を伸ばして男の唇をチロチロと愛撫しつつ、どこか甘ったれた声で拒絶する。しかしその、ほんの数秒口を吸われただけで少女の性感が劇的に増幅したのは一目で見て取れた。ストッキングのところどころに穴が空いた、すらりとしなやかで長い脚が男の腰に回され、お尻も男のあぐらをかいた腿へスリスリと絡ませている。
そんなリゼルの態度に満足げながら、男は少し険しい声で言った。
「俊太郎じゃないだろ。僕のことは、どう呼ぶんだった？」
「あぅ……」
小動物のように怯えた顔になった令嬢は、目を伏せながら男の言葉に応える。
「ご、ゴメン……、なさい。だ、……だ、ダンナサマ……」

アルデのことを引き合いに出され、命じられるまま何にでも従ってきたリゼルだが、唯一いまだにできないことがこの『呼び方』だった。

俊太郎は彼女に、自分を『旦那様』と呼ぶよう言ってくる。しかし日本語で、『主人』そして『伴侶』にあたるその呼び方を、咄嗟の状況で扱えるわけがない。

「ふふ、いい心がけだよ。リゼルちゃん」

だがとりあえず兄のためと思えばプライドは捨てられる。頭のよくない俊太郎はひどく心のこもらない語調でも満足した。乳首で遊んでいた両の手を細身の白肌へと這わせだす。スカートから手を入れているため、ワンピースの着衣はめくれあがり、ショーツに覆われた小さなヒップからウエストまでが丸見えになっていた。

スレンダーで胸やお尻にボリュームはないながら、肉全体がふっくらとした子供っぽい肢体だった。腹部は見事にくびれているのに、触ってみるとぽよぽよした心地よい脂の触り心地がある。お尻はやや芯の硬さを残した薄い肉付きながら、背筋がピンと伸びて姿勢がよいため、腰の曲線が大人びて、アンバランスな魅力となっていた。

日本人でないことが拍車をかける、お人形さんのような容姿のわりに、触感はあまりにも魅力的な『少女』のそれなのだ。俊太郎はにんまりといやらしく相好を崩しつつ指先を滑らせ、すべすべした双丘の谷間にタッチする。

「ふぃあ……っ！　しゅ、俊太郎！　どこ触ってんの！」

脂ぎった指先が触れてきたのはお尻の穴だった。排泄器官に人の指が触れるという不快すぎる事態で心臓が止まりそうになって、リゼルは大声を出す。

そんな彼女に対し、男はピクリと眉をひそめた。

「……やれやれ、何回旦那様と呼べと……」

目の前にいる少女にさえ聞こえないような小声で何事か呟くと、そのまま戸惑う尻蕾へと人差し指を捻じ込んでくる。

「――っっゃあああッッ！　やっ、やめてよっ！　痛いっ！」

信じられない不快感と、そして破瓜のとき以来の肉が裂けるような痛みに、リゼルは思わず悲鳴をあげた。

「ふん、そろそろこっちも仕込んでやるか。身体も僕好みにしておかないとな――」

「きゃん――っ！」

混乱して肩を震わしながら叫ぶ少女に対し、俊太郎は熱が冷めたとばかり淡々とした口調で呟くと、その場で急に立ち上がる。突如として支えを失ったリゼルは、貫かれた秘苑から剛棒が抜け落ちると同時にベッドの上へ落下した。戸惑いの表情で相手を見上げる。

「……ふふ、今日はちょっと趣向を変えよう。プレゼントがあるから、出かけるよ」

「え……？」

不吉な申し出に眉をひそめるリゼル……。

監禁室が地下にあったことを少女は今日になって初めて知った。

場所を変えるという男の命令によって、久々に部屋の外へ出られたリゼルだが、やはり脱走の機会はほぼ皆無だといえる。地下であるため窓がないうえに広く、左右の壁はステンレスで覆われており目印がなく、迷路のように入り組んでいた。また見張りとして四方をスーツ姿のこわもて、家主の従者たちが取り囲んでいる。さらに。

「ひひひ、ほぉらぁ。さっさと歩くんだよ」

真横からはぴったりと寄り添っている俊太郎が、相変わらず悪戯してくるのだ。

「う……っ、う、うぅ……」

顔を真っ赤にして、おぼつかない足取りながら何とかついていくリゼル。あれほど秘肉を男根で乱暴に突かれたあと、満ちきらないまま放り出された身体を、指でいたぶられているのである。肉に残るもどかしさは、内腿をすり合わせるようにしたその歩き方からよく分かった。雪肌によく似合うダークなドレスの中には、スカートをめくりあげて男の左手が入り込み、もぞもぞと上半身全体を撫で回してくる。乳首を軽く抓られるたび、発達した大腿筋から足首にいくほど細くなるカモシカのような脚が震えていた。そして男の右手のほうは、足の付け根にある大人びたシルクショーツの中に潜り込んでいる。

先ほど痛がった部分。白桃のように瑞々しいヒップの谷間に、親指をのぞく四本の指が

差し込まれているのだった。
キュッと締まった菊門は圧迫されず痛みはない。しかし四つの指をどれも別々に動かして、ヌチヌチと窄まり全体を撫で回してきた。
「っ――……。……ふ……」
背筋の末端を羽ぼうきでくすぐられているような感覚に、リゼルは眉をひそめている。
媚薬によって快楽の蜜味を覚えた秘苑の膣肉とは、まるで込み上げてくる感覚が違っていた。前部はヒリヒリして、どことなく癖になる感じなのだが、裏門はつつかれていると胸の奥がじんわり熱く、切なくなってしまうのである。少しだけ口を開けて、はぁーっと漏らした呼吸の音は、どこか色っぽいものを含んでいた。
ふにふにと乳首を揉まれる感覚が全身に広がるにつれ、お尻からくる感覚まで不快に感じなくなっていく。それが何となく怖くなって、リゼルは唇を噛んだ。いつしか四の指が入り込んだ谷間は、じっとりと汗ばんでいる。
「……お、そうだ。紹介するねリゼルちゃん」
突然俊太郎が立ち止まったため、意識が自分の中のことへとそれていた少女は思わずつんのめりそうになった。胸を触っていた男の左手が指差す先には、一枚の巨大な鉄扉がある。黒崎慶吾の書斎のものより厳重そうな印象を受ける、恐ろしく頑丈そうな扉が。
「ここ僕がデザインした我が家の宝物庫なんだ。アルデの杖はこの奥で大事に保管してる」

「――――っ！」

思わぬところで兄の名前が出、リゼルは無表情ながらわずかに目を見開いた。

「おっと、入ろうとしたって無駄だよ。この奥には厳重なトラップがある。トラップを無効化する、とあるものがないと、ひどい目にあうからね」

宝物庫の位置とその中身まで、嘘とは思えない口調で男は上機嫌に語る。だが敵の首根っこを捉えたにもかかわらず少女は気にしていられなかった。男の中指が菊座を強く押したことで腹部にビリッと強烈な電流が走り、歩くこともままならず男にすがりつく。

「う……っ、うぁ……。うぁぁん……」

上体を男の胸板に押しつけるようにして、何とか座り込むのを防ぐ。

だが両の足は元の位置に残っている……。その格好は、どこか男の指に対し腰を突き出しているようにも見えた。

「ふふふ、ほら、もう少しだ。早く行くよ」

「……は、はい……」

男たちに無理やり連れられ重い脚を引きずって歩き出す少女……。

その白磁のような脚の内側に、ツゥーっと透明な液体が垂れ落ちた。

連れてこられたのは同じく地下にある一部屋だった。

大きさはリゼルの監禁室と同じようだが、何も置いておらずその分広く感じられる。そして異様なことに室内の壁を覆うように十六人の男たちが立ち尽くしていた。リゼルはそうした全員の眼が届く、部屋の中央へと引っ張っていかれる。

俊太郎が手を放した途端、少女はがっくりと脱力してしまいその場で崩れ落ちそうになった。しかし直後に両手を縛める手錠が上方へと引かれたため立ったままとなる。そのまま両手を引く手錠は、天井にあるフックにかけられた。

膝が少し頼りなく折り曲げられた内股ではあるが、ほぼ直立姿勢である。

「それじゃあ、これからプレゼントを君にあげるね。ほんとなら一日目にやる予定だったんだけど、君が屋敷中の呪術者を狩りまくったから人手不足でね。集めるのに今日までかかったんだ。けど、その分質のいい呪術を使える連中ばかりになったよ」

相変わらず弾力に富むもち肌のヒップを好きなように触りながら、俊太郎が後ろから抱きついてくる。

耳に息を吹きかけられ少しだけ身じろぎしたものの、リゼルはその、腰から腿にかけてをくすぐるように這い回る指の動きを、甘んじて受け入れた。

「室町時代の日本人が、お偉いさんに取り入るため作り出した呪法だ。なにせ昔の日本人に使うための術だから、もともと発育のいい外人にはちょっと危険なんだけど……。異常活性するホルモンの悪さは責任取ってあげるからね」

「え……？　――っあむ、……みゃン……」

男の言葉は具体的な解説がひとつもないものだったが、『危険』であることだけは分かり、リゼルはかすかに眉をひそめる。しかし次の瞬間、楽しげに腰のラインをさすっていた二本の腕が、黒衣の上から両の胸を覆うように触れてきたことでその心配は掻き消された。

ブラの必要がないほど肉付きの少ないバストだが、触れるとふにゃっと潰れそうな感触で、ピチピチした肌の弾力が感じられる。萌えいでる途中の乳房だけが持つ、プリンのように繊細な柔らかさだった。そして未熟といえばあまりに未熟なそれは、この監禁生活で幾度となく触られ、いまでは服が擦れるのも痛いほど敏感になっている。

過敏な皮膚は他者に触られたとき、人肌で温められつつ揉まれると、たちまち性感帯へと変わる。手のひらが上下動し衣装のざらざらが胸部をさするだけで、少女は顔を真っ赤にして下唇を噛み、声を押し殺した。

そんな彼女の顔を覗き込みながら俊太郎は周りの男たち十六名に目配せする。するとそれが合図だったらしく、男たちは合わせたように低い声で何か唱え出した。

何語かは分からない……。読経のように上手く計算されたリズムがあるが、声が聞こえないほど低いためひどく禍々しい。呪文である。

――トクン……ッ。

「うぁ……。ぁにゃ――っ。な、に……？　何、唱えて……」

十六人の目線の先にいる少女。リゼルは、詠唱が始まった途端、ぶるぶると全身を震わせだした。

（あつ……っ。か、身体が熱い――）

ドクッドクッと心臓が早鐘を打ち、たちまち全身のいたるところに汗が噴き出す。少女の潮気を帯びた甘酸っぱい体臭が部屋中に立ち込めた。皮膚の内側を燻されるような、逃げ場のない熱の衝動が込み上げてくる。男に擦られ続ける胸元がとくに、ジリジリして本当に炎を近づけられたようだった。

「ね、ねぇ……っ。しゅんたろ……っ。やめてよっ。うく――、熱いぃ」

カチカチと歯を鳴らしながら、バストを襲う鈍い疼痛感に顔を歪ませるリゼル。

「俊太郎じゃないって何べん言ったら分かるんだ？」

「あ……。……ダンナ……、サマ……。旦那さまっ、や、やめてよぉっ」

傷口に塩をすり込まれているようで、鈍かったムズつきは次第に鋭く、間断のないものへと変わり始めていた。破瓜の激痛にさらされたときから、少女の中には男たちから与えられる『痛み』への恐怖が、本能に近い部分へと刻み込まれている。その恐怖心に抗うには、兄という心の支えを失った少女では幼すぎた。

ふにっふにっと華奢な乳房をリズミカルに揉みながら男は、愛らしい顔に浮かんだどこ

か蠱惑的な表情に、上機嫌そうに語る。
「大丈夫。ただの豊胸だよ。君のおっぱいを大きくしてるだけだ」
「おっぱいを……？」
その旨だけは理解でき、リゼルはすーっと血の気が引くのを感じた。思えば黒衣の下で乱雑に潰された乳房の肉が、男の指間からはみ出ているような気がする。ほんの少しカーブを描く程度の隆起だったのに、いまは潰れるほどの厚さの肉が乗っているのだ。
「――く……っ。うぅぅぅ……っ」
肉体を改造される……。それは現実味が薄いためかさしたる恐怖こそなかったものの、処女を奪われたときよりも悔しかった。自分の身体が。自分を構成する根本的な要素が、憎むべき怨敵の思うままに作り変えられる。これ以上の屈辱はない。
低く呻きながら、ここ数日見せなかった、憎悪混じりの凛々しい視線で男を睨む。だが長い監禁生活のため幼き魔女の眼光は、どこか精彩を欠いているように見えた。
意識していると次第に胸の辺りが格別熱くなっている気がしてくる。とくに乳首にいたっては汗が垂れ落ちるだけで針が刺したように痛んだ。男の手が触れているのも我慢できず、吊り上げられた両手を軸に全身を揺すって、俊太郎から離れる。
「ホルモンが悪さを始めたみたいだね……」
口元にサディスティックな微笑を浮かべた男は、何もせずとも余裕を失っていく少女の

様子に満足しながら、その場でしゃがみ込んだ。

目の前にきた長い脚を見つめ、さらにうっとりと相好を崩す。

全体的に未成熟な妖しさの際立つリゼルだが、その脚のラインは日本人が到底持ち得ない魅惑をたたえていた。ただ長いだけでなく、腿は適度に発達していて肉付きがよく、足首に向かうほど細くなっている。ツンと上向きのお尻は無駄な肉がないため、逆に腰周り全体に優美な印象を与えていた。

手を吊られているため必然的に背伸びするような爪先立ちになっているのがいかにも子供っぽい。大人びた美脚とのアンバランスさに酔いしれながら俊太郎は、肉付きは薄いながら弾力のあるお尻に顔をうずめた。

「――ひゃうっ！」

驚いて腰を逃がそうとするリゼルだが、男はその行動を読んでいたのかすでにがっちりと腰を両手で押さえていた。それどころか片方の手でクリトリスを、もう片方の手で華奢な陰唇を捉え、指先で弄んでくる。

莢（さや）からむき出しにされた肉真珠をねとねと押し揉まれ、敏感な少女は軽い痛みに眉根をしかめた。男は気にせずもう片方の手で、色素の薄い花弁の内側に指を二本差し込むと、我が物顔で粘膜を攪拌してくる。

「やう……っ。あぅん……。や、やめ――。まって、しゅんたろ……っ」

しかし思いがけず少女の鼻先から漏れた音色は、どこか悩ましげだった。とぎれとぎれにねっとりとした呂律の回らない口調で文句を言う。

ラビアの形状も色合いの美しさも、数日前に処女を奪われたときから全く衰えていない。しかし無垢な肉体は、男の手によって性感にひどく弱く調教されていた。あっという間にクリトリスは腫れあがり、中心孔からは粘り気のある愛汁がこぼれる。

先ほど部屋で犯され、ここに来るまでにも指で弄られて。何度となく高められたのにまだ頂点まで到達していない欲求に、少女の子宮が不満を訴えだしていた。

するとその反応に、彼女の肉の全てを知る男は次なる手を加える。

ピチピチと張りのある尻たぶに埋もれた顔を、軽く横に振ると、谷間はすぐにぱっくりとその口を開けてしまう。

先ほど四つの指にあれほど揉み込まれ、熱くなっていた肛門に冷たい空気が触れて、リゼルはぶるっと肩を震わせた。

「……ふにゃあっっ！　ひゃ……っ、な、なにしてるの……っ？」

その器官がもう一度温められる。ひどく熱い軟体が一体何なのか、リゼルは一瞬分からないでいた。

「……な、舐めて……。――っひっ……！　ぃ――っ！」

食事を取るための部位で排泄器官を舐めている男の存在に、少女は思わず悲鳴を漏らす。

だが俊太郎は全く意に介さず、唾液の乗った舌でぺちゃぺちゃと花の蕾に似た少女の窄まりを舐め揉ませ続けた。

白人だけあり色素の薄いリゼルのそこは、やや薄めの紅色といった感じだった。それに舐めて不潔な感じは一切なく、ここ何日もリンゴ味ゼリーしか食事の与えられていないため排泄臭もない。変わりに香料特有の甘い香りが幾分体内で凝縮され、胸の焼けるような生々しい芳香が漂っている。

甘みに誘われた蟻のように男は、ぬとぉっとした唾液を潤滑油に、とうとうその奥部にまで舌を滑らせてくる。

（にーや……、お尻気持ち悪いよぉ……）

どんなに蹴っても微動だにしない男が不気味で、逆に兄を引き合いに出されると思い当たったリゼルは、自分から抵抗をやめた。術法を課せられ続けているため胸乳にはジリジリと熱い疼きが渦巻いている。しかしそれを忘れるほどに、アヌスをしゃぶられる恥辱は凄まじかった。硬く尖らせた舌先がコリコリと括約筋をつつくので、つい下腹部から力が抜け、ふわぁっと菊座が開く。その拍子に直腸へと押し進んだ軟体の感触に、思わず涙が出そうになった。

先ほど指を入れられたときと違い、あまり痛みは感じなかった。むしろクリトリスや蜜壺から放たれる感覚が、後ろから押し上げられ倍増したような気がする。しかしその恥ず

かしさ、屈辱感は、一向に弱まらないのだ。

「……はぁ……っ」

深いため息をひとつつくと、喉をそらして天井を見上げるリゼル。パッチリとしたマリンブルーの瞳をほんの少し潤ませて自分の手を縛めるフックを見つめた。そうしながら呼吸を、なるべく上ずらせないよう深いものへ切り替える。

下唇を噛み締め、時おりンッ、ンッと鼻先から詰まったような息をこぼしながら、恥辱に耐えるリゼル。……しかし分かっていたことだが俊太郎は恐ろしくしつこかった。もう何十分も尻孔をしゃぶり続けている。

「……？」

やがて異変が起こったのは、少女のほうだった。

息苦しい……。胸部を誰かに圧迫されているように、呼吸が詰まりだしたのだ。

理由はすぐに思い当たり——というか感じ取り、下を向く。

「ひ……」

予想通りの最悪な事態に、目元に涙を滲ませるリゼル。自分でも気づかないうちに異常なほど膨れあがった肉の隆起がそこにはあった。もともとは無理やり寄せ集めてもAカップなかっただろう乳丘が、いまはざっと見てBカップという大きさまで発達している。息苦しいのはそのサイズが衣服に合わず、着衣に胸が締めつけられたためだった。

「へぇ？　気づかなかったけどもうそんなに育ったか。ふふ、やっぱり外人は育ちがいいね。このままならD、いやEくらいは楽勝でいきそうだ」

さらに少女の身体を作り変えるという恐ろしい宣告をしながら、男はようやくヒップの谷間から顔を引き抜く。立ち上がるとズボンを下ろし、先ほど少女の肉を中途半端で放り出したためいきり立ったままの肉棒を双臀の中央へと押し当ててきた。おちょぼ口の蕾をヌチヌチとくすぐりながら、形を変えた胸へと手を伸ばす。

「――――っっきぁ……っ。～～～～～あぁ――ンッッッ!!」

リゼルはその乱暴な行為に、過剰なほどの反応を示す。

もともと過敏気味だった胸丘の性感が、何倍にも膨れあがっている感じだった。むにむにと雑に揉まれるだけで胸に渦巻く切なさが全身に痺れとなって広がる。

男たちが豊胸呪術の詠唱を始めてからというもの、全身を襲っていたジンジンと熱い不快感が、俊太郎の手の動きに合わせねっとりした肉芯の痺れへと転化していった。乳房全体に強烈な倦怠感があり、それをマッサージでほぐされているような心地よさがある。だが揉まれるごとに倦怠感は強まり、まるで際限ない背悦の坩堝に落ちていくようだった。

「ぁんっ。ふくぅっ、ぅ……。ぅぁぁん……っ。あぅ……、にゃはぁ……」

服のベルトになっているリボンをほどくと、ジャンパースカートの中にはそこそこの空きができる。呼吸が楽になると同時にぐにゅっぐにゅっと乳房を揉みしごかれ、布地が乳

首を擦りあげると、少女はたまらず悩ましげな鼻息を漏らした。とくにその瞳は、うっとりと陶酔を帯びている。

俊太郎が手を伸ばしてフックから鎖を外した。天井に吊られていた両手が下ろされ、少女には少しながら自由が戻る。しかしそれでも、逃げようという素振りは見せなかった。乳肉をねちっこく揉み解されていると、だんだん身体に力が入らなくなってくる。

床に崩れ落ちようとする少女だが腰だけは男が抱えているため、獣のような格好になった。両脚は伸ばしたまま、手首から肘までで全身を支える体勢だ。短いスカートは前に垂れ落ち、真っ白な腰までがあらわになった。

脚が格別長いため、ドッグスタイルになると腰の高さが強調される。ツンと上向きのヒップの谷間にある小さな紅孔も。

「ふふ、今日の主役はこっち。アナルセックスだよ」

胸をしごかれるごとに意識を混濁させていく少女の尻穴は、いまもキューッと窄まったままだった。だが時おり乳首を強くつままれると、軽く緊張が緩むときがある。それを見計らって男は一気に腰を前にずらした。

「え――――？　うぁっ、ヤ……。う……っ。う……っ！」

ピリッと括約筋に走る痛みで何をされているか悟ったが、すでに遅かった。舐め回され濃い紅色に充血した肛孔は、ぬたくりつけられた唾液を潤滑油として、少しずつ張り詰め

た硬肉を呑み込んでいく。
雪白の尻が恐怖に悶えるが、男の手がガッチリ押さえつけているため逃げることはできなかった。愛らしい桜色の唇から覗く綺麗に生え揃った歯が、グッと噛み締められる。お尻の中心に焼けつくような痛みが走った。
身体の中からメリリッと壮絶な音が聞こえ、破瓜のときの肉が引き裂かれるような感覚が思い出される。
（お、おちんちん……、入ってくる。ヤッ、お、お尻の穴でセックスして――）
お尻の谷間に力を込めるのだが、すでにエラの部分が入り込んでいるため、熱い剛芯を止めることはできなかった。幹（みき）部分を覆う分厚い皮が根元のほうへ寄っていくだけで、菊花の形をした蕾は限界まで広げられ、いやおうなしに牡との交合を深めてしまう。言葉通り肛門のセックスだと分かり、リゼルはいやいやと首を横に振った。
痛みだけならばこらえようもあるのだが、排泄器官を犯されるショックは、幼く世間知らずな令嬢が耐え抜くには度を超えている。
「おおっ、すげぇ、む、むちゃくちゃ締まるよ。それにこの……、腸の感触が……」
だが少女の苦しみとは裏腹に、俊太郎はどっぷりと肛虐の悦楽につかっていた。
括約筋辺りの異物を引きちぎるような締めつけとは裏腹に、温度の高い直腸はぐんにゃりと蕩けそうなほど柔らかい。ヴァギナも名器のリゼルだが、こちらはまた別の意味で男

をうならせていた。これまで何百という女の菊処女を奪ってきた俊太郎でさえ、あまりの具合のよさに法悦で顔を歪めている。

「やぁ……っ。へっ、へんたい……っ。ぬいて――。いたいよっ、抜いてっ」

ずぶずぶとゆっくり結合を進めていく尻蕾でのセックスに、リゼルは息もたえだえといった様子で訴える。よりによって排泄のための口にペニスを捻じ込んで楽しんでいる、日本人の異常さに、気が狂いそうだった。内臓が壊れてしまいそうな圧迫感を覚えながらも、やがて交合は根元まで遂げられる。異物に括約筋を無理やり拡張されていると、排泄を途中で止められたようで、両の美脚が砕け落ちんばかりに激しく震えた。

「ふふん。僕が変態ならちょうどいい。リゼルちゃんみたいなマゾの変態はすぐに慣れるよ。ほらほら、アナルセックスはここがツボなんだ」

自信満々に言ってのけ、俊太郎はわずかに腰を引くと、亀頭部でぐりりっと腸壁を小突き始めた。膣壁側の、ちょうど子宮口の少し下辺りである。

「ふぁ……？」

そこをプッシュされた途端、ゾクゾクッと嫌な予感が全身を駆け、少女は涙の浮いた目で肩越しに男を見た。

「前立腺っていってね。女の身体だと成長するにつれてヴァギナ側のGスポットって部分に発達していく気持ちいいツボがあるんだ。でも男女差のあまりない子供の身体だと……

っ」

グッと腸壁がきしむほどの強さで、狙い定めた箇所へと亀頭の裏筋を擦りつける俊太郎。

「――きっひゃぁあっ！　やっ、やめっ。そこやめてっ。そこ嫌ぁぁっ！」

「……そこはアナルセックスでも感じることのできるツボになるんだ」

たった二回、剛棒が男のいう『前立腺』を強く押しただけで、少女は激しく狼狽した。

媚肉に挿入を受け、最奥を直に抉られたときさえ感じなかった衝撃が子宮を襲ったのである。痛みとは明らかに違う、媚孔全体がヒリつくようなむず痒い痺れが。

下腹部が勝手に震えて、淫花の中心孔からじわぁっと熱い液体が漏れた。

「ほらほら、病みつきになるだろ？　アナルセックスは」

男は少女の官能を引き出すため、硬い括約筋の辺りにはあまり震動がいかないようにしながら、奥では前立腺という不思議な性感帯をずぶずぶ抉り出す。

「やっ、し、しないでっ。そ、……そこ怖いっ、そこ怖いのっ」

自分の内側から湧き起こってくる獣めいた感覚に戸惑うリゼルは、たまらず哀訴の声をあげる。

これまでの監禁生活で教え込まされた性感とは、似て否なる感覚だった。腰の付け根がひどくむず痒くて、無意識に剛杭を刺されたお尻をくいくい上下動させてしまう。括約筋を割り開かれる痛みはすでに全く別のものへ変化しており、いつかその感覚に、男の言う

通り病みつきになってしまいそうで怖かった。
　だが俊太郎は気にせず、幼い女体にしか存在しないものの、しっかり性感のツボとなっている前立腺を突きながら限界まで結合してくる。唾液の潤滑油も手伝ってアヌスがたっぷりほぐれたのを感じたのだろう。本格的なピストン運動を開始した。形のいいお尻の谷間に亀頭が覗くほど浅くまで、ゆっくりと引き抜いていき、また一気に戻す。
　腸壁がタコの吸盤のように異物に張りつき、うねうねと外に追い出そうとするような蠕動を見せた。痛いほど締まりのいい括約筋といい、S字型のちょうど雁首に擦れる構造といい、膣肉にはない心地よさに俊太郎は目元を緩めている。
「うぐぅぅ……、たすけ、助けてにーやぁ……。ヘンに、へんになるよぅ……」
　少女もまた十回も抉られるころにはすっかり痛みを訴えなくなっていた。お尻で肉杭を受け止めつつ、発情期の猫のように背をそらしている。ピンと伸ばされた太腿の内側は狂ったように秘苑が滴らせ続ける蜜で、べっとりになっていた。
「薬も使ってないのに、オマ○コでやるよりよっぽど嬉しそうだねぇ」
「そんな……、そんなこと。うぅぅっ。もう、もう……っ」
　一突きされるごとに子宮がむずついてしょうがなかった。腰を震わせ、両の脚を懸命に擦り合わせる。しかし疼きはやむどころか、凄まじい勢いで膨れあがっていった。
（にーや……、ちがうよ。リゼルは変態じゃないもん。お、お尻の……。ちがうもんっ）

心の中で必死に弁明しながらも、もはやモジモジと腿をすり合わせる媚びめいた動作は止まらない。

動かすたびに両尻の肉がよじれて、男のそれにギッチリと噛み付いた括約筋に熱いパルスが走った。痛いような、自分の中の何かがそれを望んでいるような。形容しがたい感覚。

「ふふっ。ケツを振りだした。相当アナルが気に入ったんだねぇリゼルちゃんは」

「ちっ、ちがうもんん……っ。お、お尻は……。お尻はぁ……」

強がりの言葉さえろくに吐けず、令嬢はお尻に力をこめてぎゅうっと異物を締めつけた。男に擦られ続けたツボもいつしか強烈な熱を帯び始めている。そのせいか、お腹の中がジンジンと痒くなってきていた。男根から淫らな細菌が感染したかのごとく腸壁はとろとろに蕩け、一突きされるごとに嬉しそうにヒクついている。

（いやだよぉ。お尻いやなのに……。いやなのにぃ……っ）

ずぶっずぶっと双臀の谷間に暗紫色のオスが消えていくたび、少女の身体は破廉恥な悦びに抗えなくなっていった。

両の足が背伸びでもするように爪先立ちになり、肉付きが薄く可愛らしいヒップがこれ以上ないくらい男の腰に打ちつけられる。

「ほらほら。こっちも揉んであげるから、素直にお尻が好きですって言ってごらん」

手を伸ばした男が少女の上体を持ちあげた。見るとすでに少女の乳肉は、Cカップ程度

にまで発達している。幼い子供が着るタイプのゴシック衣装が、胸元だけ下から柔らかな張りに押し上げられている様はなんとも淫靡だった。

両手で遠慮なくその妖しい膨らみを掴むと、わしわしと乱雑に揉みしだく。その間にもしっかりと、アヌスをほじくることは忘れていなかった。白人特有のモチッとした肉質のため、無骨な指が驚くほど深く柔媚な乳肉へと食い込む。いまや少女のバストは、男の五指が鷲づかみにしきれないほどの大きさへと発達していた。

「ふに……っ。にゃぁんっ。うぁ……。お、おっぱいが……。おっぱいがぁ……」

直腸が妖しく疼いている最中に、むにっむにっと大きくなった胸乳を揉みぬかれてはたまらない。

ただでさえ肌が過敏なうえに、いまは厚みを増した乳肉の内側からは、揉み込まれるごとに奥深い悦びが吹き出すのだ。怪しげな術法のせいで女性ホルモンが疼いて、甘ったるい愉悦の中、少女の理性はもはや押し寄せる肉欲の波に抗いきれなくなる。下からぐいぐいとお尻を犯される感覚が、胸丘を揉まれる感覚と混じり合って、間に挟まれた子宮がカーッと痛いほど熱くなった。

「おっぱいぃ……っ。おっぱい好きぃっ。おっぱい好きぃぃっ」

グリグリと特に強く直腸のツボを押されながら、乳首を抓られた。それだけでビクッビクッと痙攣するように身体をよじらせるリゼル。自然と上体が持ちあがるため、いまの少

女は鋭角に腰を折り曲げた、男に向かってお尻を突き出すポーズになっていた。
乳虐の愉悦に酔いしれながら、背を少し曲げてアヌスから男根を生やす妖精の姿は、どこか排泄という行為に悦びを覚えたようではしたなく、卑猥に見える。
（うぅぅ……。どうしよ……、変態なのが気持ちいいよぉ）
本来性という悦びを得るべき蜜園にはなんら刺激が与えられないのに、身体がいやらしく疼いて仕方なかった。ぴったりと男の不潔な逸物にベーゼしたアヌスや、道具のように膨らまされた乳肉からの感覚だけで、他には何もいらないとさえ思えてしまう。肛門をズンズンと荒く突かれているせいで衝撃が伝わり、子宮までもが悦びに打ち震えた。
「お尻も僕のをキュンキュン締めつけてくるよ。これでもまだ抜いて欲しいの？」
からかい混じりに言う俊太郎の声に、少女は恥ずかしげに俯きながら首を横に振る。
そのまま強要されたわけでもないのに、自然と言葉を口にしていた。
「にゃは……。お、おねがいです……。抜いちゃ……」
媚び入るように告げるリゼルの表情には、マゾヒスティックな色が浮かんでいる。
お尻を犯されていることで、これまでの数日には意識しなかった被虐的な悦びが少女の中で芽生えだしていた。
自分の全身が征服されているこの状況に異様なほどの興奮を見出してしまうのだ。破瓜のときに少しだけ刻まれたマゾの要素が、どんどんと色を濃くしていく。

「〜〜あっ、あっ、あっ。お尻……、ヤ、お尻でイッちゃいそう……」
せりあがってくる官能の極地を覚えた令嬢は、俊太郎から教えられたオルガスムスを予期する言葉を呻きながら、男へと媚びの色濃い視線を向けた。
「いいよイッても。僕もそろそろ出すから」
男がそう言うだけで、ぽーっと赤らんだ顔を喜悦に震えさせる。ふりふりとお尻を左右に振りたくる仕草は、餌を食べる許可をもらった犬のようでもあった。
「ンッ、ンッ。ゃふ……っ。はにゃぁぁ……っ。い、イク……。いくいく……」
絶頂を意識した途端に、直腸を荒々しく突きまくる肉棒の摩擦が、耐えがたいものになり、令嬢は鼻先から甘い声音で喘ぐ。
「あ……っ。あ〜〜〜〜〜……っ。あぁぁぁ〜〜〜〜〜っ」
居心地悪げに全身をくねらせる。しかしそうするごとに体内では野太い男根に粘膜がよじれて、痛みとすれすれの喜悦を生み出すのだ。
「にゃぁぁあ……っ、ン――っ。も、もうだめぇぇっ」
たまらない感じで腰をローリングさせながら、リゼルは一気にオルガスムスへと駆け上がりだした。
「あっ……。いっ、イクぅっ！　お尻の穴でっ。お尻の穴でイキますぅっ！」
少女は表情に濃いマゾの紅を浮かべながら肩越しに俊太郎を見る。

「だっ、旦那さま……っ。旦那さまも一緒にっ。一緒にイッてぇっ！」

無意識のうちにリゼルは、彼女にとって隷従の証である『旦那さま』を連呼していた。兄に対する愛情とは全く違う、だが禁断という意味で共通した女の喜びが、驚くほどその言葉への抵抗を薄れさせている。アナルを抉られる快感は、それほど彼女にとって鮮烈で、手放しがたいものだった。

キュウッと肉幹を放さぬよう菊蕾が限界まで窄まる――。

「うっ、うく……っ。おおっ」

その締まりと、直腸の異物を歓待するような蠕動がたまらず、男は半ばまで引き抜いていた腰を一気に少女へと押し進めた。

「ふぃぅ――――ッッ！」

腸壁のツボがこれまでで最も強くプッシュされる……。

――どぷ……っ。びゅくくっ！　びゅるっ、びゅるっ！

「――ふにゃぁあああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっっ!!」

前立腺に灼熱のマグマを直接噴きかけられ、リゼルは激しく背を仰け反らせた。

「あ……っ、あ……っ、あ――――っ！」

込み上げてくる絶頂感……。それに従って、疼きの限界に達した子宮が、壊れそうなほど激しく痙攣する。

「あぇあああああぁぁぁ

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/